

アチェの復興とツーリズム

「むしろ、私たちのほうから日本の防災への取り組みについてお聞きしたい」

2004 年 12 月のスマトラ沖地震・津波の被災地バンダアチェ市職員に防災体制のインタビューをした際、このように言われ、私は少し戸惑いました。

私は災害の風化を防ぐための「津波防災の日」指定と視察者が集まる津波遺構での「ボランティア語り部」活動の実施を提案しましたが、この平凡な提案をメモに取る職員 3 人の姿から、防災の取り組みがここでは行われていないことが察せられました。

この経験は、今年 3 月末、私がインドネシアのアチェ州へ向かった際のものです。スマトラ島沖地震と津波の災害からの復興状況を視察するためです*。

東日本大震災と比較すると、アチェの津波被害の大きさがよくわかります。アチェ州は人口約 500 万人のうち約 20 万人、州都バンダアチェ市では住民約 26 万 4 千人中約 7 万 1 千人が死者・行方不明者です。東日本大震災での犠牲者は全国で 2 万人弱、石巻市で約 4 千人弱ですから、アチェの被害規模には驚くばかりです。

アチェ州はインドネシアの中でイスラム教色の強い地域です。街中では、スカーフを頭に巻いた女性の姿やモスクが目につきます。イスラム教の中では原理的ではありませんが、朝 5 時から始まるお祈りは 1 日 5 回（2 回を 1 回への統合はある）です。豚肉とお酒は口にしません。一方、現在のアチェではシャリーアという厳しいイスラム法があるため、犯罪は少ないそうです。

かつて存在したアチェ王国に人々は高い誇りを持っているようでした。全インドネシアでは多数派に当たるジャワ人等へのライバル心も強いようです。2004 年末の津波災害前は独立闘争を行う武装勢力があり、中央政府からの弾圧もありました。とくに政府軍による人権侵害への告発が行われていました。ツーリズムについては、外国人のアチェへの移動が禁止されていたそうです。

2004 年末の津波は、このようなアチェの状況を一変させました。インドネシア軍政府が外国からの支援を受け入れると、津波の翌日から米国軍が水の配布を開始し、その他の政府も NGO 等の団体もアチェに殺到しました。その人と物資の襲来が「第 2 の津波」と呼ばれるほどです。独立運動をしていたグループと政府との間に和平協定が結ばれ、アチェは自治を獲得しました。

外国からの支援をあまり受け入れなかった東日本大震災後の日本に比べ、アチェは外国中心の復旧・復興が進められました。外国政府が直接住民との間で協議し、新しい住宅を建設しました。トルコ村、中国村、などと呼ばれる村の住宅は、建設数が多かったため空室が目立

つほどだと言います。このような点は、中央政府がコントロールを効かせる日本とは大きく異なります。

災害の受け止め方は、日本とインドネシアでは大きく異なります。生き延びた人が語る災いは神の試練、生き延びた恩恵もアラーによる、とされることが多いようです。これに対し、日本の私たちは、災害に際しても、行政の責任と対峙することが多いと思います。

アチェでは、災害後、津波に対する被災者の経験・感情の表現が日本より直接的です。500 人ほどの方が亡くなったという市内の運動場には、まさに波そのものをかたどったオブジェが設置されていました。

運動場の隣にある津波博物館では、入場するとすぐ、天井から両側の壁を伝って水が流れています。これも、すぐに津波を連想できる直接的な表現形式でした。

日本では自然災害への慰霊や関連展示がその災害そのものを連想しやすい形にすると、「被災者感情を傷つける」という批判がありそうです。

また、災害後、通常感覚に戻るまでの時間も日本人とはずいぶん異なるようです。先の運動場では、津波からちょうど 1 年目に津波災害の日を記念したマラソン大会が開催されたそうです。この件について市職員に尋ねましたが、市民からのクレームはなかったそうです。日本人と比較すると、アチェ人が喪に服す時間はずっと短いようです。

インドネシアと日本で経済発展の段階が大きく異なることも、災害についての意識が異なる原因かもしれません。食事をしたバンダアチェのレストランで、高齢女性の乞食に手を差し出されました。貧困は存在します。日々の生活費に追われる人には、いつ来るかわからない災害への備えにお金を使うのは、難しいことです。

陸地に上がった巨大な発電船や二階にボートが乗り上げた家の前では、ツーリストに津波の DVD やお土産が売られていました。人の感情や防災よりも当面のお金が大切にされていると感じました。被災から同じ年月がたっても、日本ではこうならないと思います。

政府が貧しいため、三陸地方の海岸にあったような巨大な津波対策堤防は、インドネシアでは金銭的に無理でしょう。バンダアチェの海岸に今ある石積みの堤防は海岸侵食を防ぐもので、津波は防げません。多くの住民は被災地域に今も住んでおり、個人での対策は一階を高床にし二階に住むのが精一杯です。アチェには、日本が果たすべき防災面での協力の余地が確かにあります。

（丸岡泰）

*大学間連携共同教育推進事業(代表：小田隆治山形大学教授)



日本が建設協力した津波避難ビル

雲仙岳噴火後の災害遺構展示*

災害遺構をどのように保存するか、東日本大震災後、どの被災地でも頭を悩ませている問題だと思います。今年2月、長崎県島原市を訪れた際に、この問題について考え方のヒントを得ることが出来ました。

1990年頃から活発化した雲仙普賢岳の噴火は、1991年6月の火砕流発生がピークとなりました。この火砕流で火山研究者を含む43人が亡くなったのです。

犠牲者の出た北上木場農業研修所では、現在、見学の一般開放をしていません。私たち研究チーム3人も申請書を書いて許可をもらいました。また、学校の見学でも事前に申請があれば対応しているそうです。

火砕流により焼け爛れた小学校が一般公開しており、土石流に飲まれた家々が道の駅に隣接し一般の方の目に留まりやすくしてあることに比べると、農業研修所の非公開方針は、遺族や住民の感情に配慮したものと考えられます。この方法は石巻でも参考になるでしょう。

災害の教訓を残す「がまだすドーム」(「がまだす」は「がんばる」意の島原の方言)が様々な展示をしています。ここでは、火砕流・土石流の速さ・熱を訴える展示が多くを占めています。農業研修所で発見された犠牲者のテレビ記者が撮影しのちに発見された録画テープも上映されていますが、ここは有料の施設なので、地元住民の目に触れる機会は少ないと思われます。

「島原大変肥後迷惑」…約200年前の天災がこのような言葉とともにがまだすドームで上映されています。電動の紙芝居仕立ての落語的な演出でこの災害がわかりやすく紹介されています。良い防災教材です。

石巻では今年、支倉常長がヨーロッパへ向かって400年という節目です。支倉が石巻を出発する2年前、東日本大震災のちょうど400年前に慶長の津波がこの地域を襲ったという記録があります。私たちはこの災害の記録を勉強しておいて、外部から石巻圏を訪問する人に伝えることはできると思います。400年前の記録ですので、「島原大変肥後迷惑」と同様、被害者の感情を傷つける心配は少ないと考えられるためです。

観光地の島原城には行政の災害復興予算で作った災害展示会場がありました。時節柄、雛飾りが並べてありましたが、良く見るとこの雛飾りは災害関連の展示の上に紅白の幕を張り、その上に展示してあるのです。通常の観光と災害の展示が両立しにくいいため、このような苦肉の策になったと思われます。この点も、東日本大震災後の観光地づくりで参考にすべきだと思います。

(丸岡泰)

* いしのまき地域観光振興セミナーでの筆者講演に依拠。(平成25年2月27日於石巻専修大学)



土石流被災家屋保存公園(南島原市)



ウェルカムフェスタ 2013 in 石巻港

来る5月9日(木)、石巻港中島埠頭に入る大型客船「ふじ丸」の歓迎イベント「ウェルカムフェスタ 2013 in 石巻港」が開催されます。このイベントは石巻港大型客船誘致協議会が実施し、石巻専修大学が協力します。

市民向けに、14:00~15:00の間、見学の時間があります。事前申し込み50名までです(応募者多数の場合抽選)。

イベント本会場では、石巻市・東松島市・女川町・松島町の観光PRコーナーが9:00から17:00まで設けられます。その他にも、海産物の炭火焼きが15:30~16:30までの1時間でお客様に提供されます。

出港セレモニーでは、太鼓・踊りなど各市町の伝統芸能が披露されます。イベントの最後には打ち上げ花火が上がります。

今回のイベントでは協力する石巻専修大学のスタッフの活躍が期待されています。同大学では今回のイベントで3つのブースを用意します。

同大学石原ゼミでは、鯖だし焼きそばをお客様に無料で振る舞います。同庄子ゼミでは、東日本大震災で被災した石巻の震災時の写真を展示します。同丸岡ゼミでは、「シャドーボックス」の製作体験のブースを設けます。同時に支倉常長の実物大肖像画と写真撮影できる場所も設けます。また、震災体験の語り部の学生ボランティア案内も、清水特任教授の指導で行われます。

「ふじ丸歓迎 ウェルカムフェスタ 2013 in 石巻港」は9:00から17:00までです。雨天時は、協議会が実施/中止決定をします。ご了承ください。

(阪口卓也)